2024/6/20
読書会

阿部公彦（2024）文章は「形」から読む―言葉の魔術と出会うために―集英社新書

第６章　挨拶を読む

日常生活の中で私たちは頻繁にあいさつをかわします。面白いのは、話し言葉との世界と同じように、文章の社会でもこうした挨拶が行われているということです。また、文章の一部が挨拶の役割を果たすだけでなく、文章全体が挨拶として機能していることもあります。まずは前者（一部が挨拶）を具体的に見てから、後者（全体が挨拶）にも話を広げていきたいと思います。 154

東京大学総長の学位授与式での告辞を見てみましょう。挨拶ならではの特徴かもわかりませんが、この機会を祝うおめでとうスタンスのようなものが濃厚に出ています。ここでの挨拶の機能とはどんなものでしょう？それは、「私はあなたに挨拶しているのだよ。あなたのことを祝っているのだよ」ということの確認です。しかも、この確認をしつこいほど何度も出てきます。冒頭の「おめでとうございます」以降、五段落だけでも、実にたくさんのおめでとうフレーズが散りばめられています。 156

なぜ、これほどしつこく「私はあなたを祝っているのだよ」を確認するのでしょう。実はこの繰り返しにこそ意味があるのです。挨拶にしても、お祝いにしても意味を伝えることが大事な目的ではないからです。いや意味はもちろん大事なのですが、意味を伝えることによって意味を伝えるのではないといったらいいでしょうか。意識レベルでは「自分は・・・ということを伝えている」と思っていても、言葉の運用の中では抽象化されたメッセージ以上の何かをも伝えているのです。 158

それをするのが言葉の「身体」の部分です。言葉の頭の方は、頭の中で用意したメッセージを送りだすことに精一杯で受け取る側も、受け取ることに精一杯。しかし、言葉はメッセージのやり取りだけで完結するわけではありません。言葉には形があり、「身体」があります。総長式辞のお祝いモードの繰り返しは、まさにこの「身体」に当たるわけです。さまざまなお祝い言葉を次々に繰り出されても、言葉の「頭」の部分は無反応でしょう。しかし「身体」の部分はしっかりと反応するのです。なぜなら繰り返しという言葉の物理的な横溢を通して、メッセージ内容としてはなかなか伝えることのできない言葉の物質性と出会うからです。 159

言葉そのものの運動を通してめでたさや華やぎ、浮遊感、さらには厳粛さ、崇高さ、そして、かすかな哀しさや悲壮感などを身体的なこととして感じ取れることがあります。これらは頭ではなく身体でこそ、感知されるべき「ことばの出来事」なんです。式というのは、まさにそういうものです。頭で分かっている時間の中の区切りを、より身体的に感じるために行われるものです。だからそこにメッセージとしての意味を求めるのは違うのです。儀礼や祝祭は身体的に受け取られる必要があ 160

ります。

なぜ総長はこんなに執拗に確認する必要があったのでしょう？ それはおそらく総長が確認しているのが祝っているよという事実だけでなく、私はあなたを祝っているよという私とあなたの関係性でもあるからではないでしょうか。この関係性の確認を通して、総長はひょっとすると、「これからも仲良くしようぜ。これまでも仲良かったよな。俺たちは昔からずっと、そして未来永劫の仲良しさ」といったことも確認しているのかもしれません。これは関係性の確認であるとともに、関係性の樹立構築でもあるということにも気づきます。つまり、総長は挨拶という場でしばしば行われる関係性の確認という身振りを通し、実際には関係づくりそのものを行っているわけです。これが挨拶の奥深い部分でもあります。確認のようなスタンスを取ったこうした関係性の充実こそが挨拶の最も大きな機能だと言えるでしょう 162

電子辞書のマニュアルの冒頭にも挨拶があります。どのマニュアル も似たようなものです。おもしろいのは、それでも表向きだけは愛想よくして、とりあえず挨拶をしてますからねと言うスタンスが取られていることです。つまりここでもポイントは挨拶という身振りを通して、語り手と読み手とが関係性を樹立しているというところにあるのです。 165

第７章　契約書を読む（１） 181

第一章でも紹介したように、国語という科目をどのように教えるかについて、この数年、熱い議論が交わされてきました。その火付け役となったのは、大学入学共通テストのモデル問題でした。ここに従来見られなかった新機軸の問題文として、駐車場使用契約書などが組み込まれていたのです。今では駐車場の契約書は国語教育の瞑想を示す抽象的な例として、事あるごとに言及されるようになっています。

契約書は特殊な文章です。私たちが普段接する多くの文章と並べてみると、明らかに不自然でローカルな言葉の使いかたに依存しています。このような特殊な様式で書かれたものを、まだ標準的な日本語の書き方も習得できていない段階の生徒に無批判に押し付けることは果たして望ましいのでしょうか？ 契約書的な文書の書き方を既定路線として受け入れさせるよりも、どこにそうした文章の特徴があり、どこが奇妙であったり面白かったりするのかを確認することから始めるべきではないかと私は考えます。 182

改めて契約書の文章としての在り方をじっくり観察してみたいと思います。契約書は一体どこが特殊なのでしょう。 183

この例文で明らかに目につくのは語尾です。締結する賃貸するといった終止形基本形が目に付きます。こういった語尾が続くことは、普通の文章や会話ではあまりないので、なんとなく収まりが悪く感じます。どこか不自然に押し付けがましく過剰で「ただ事ではない」感じがします。しかし、この「ただごとでない感じ」は、 188

まさにこの文章の狙いだとも言えます。

「・・・する」という語尾は通常は基本形として注目すらされないかもしれませんが、あえてこの基本形をそのままの文の中で使い、かつそれを連続させることで際立たせて「＜する＞の文脈」を用意すると、このように強い拘束感を持たせることができるのが興味深いところです。 191

契約書では文言そのものが「する」という強い拘束力を持って、つまりわかりやすく言うと「私はするよ！」と宣言しつつ、強制力を振りかざして現実そのものに成り代わろうとしているように感じられます。 192

挨拶が繰り返し「おめでとう」と言うことによって、関係性を作り、「形」を作っていたように、駐車場の契約書の「今（・・するという表現の繰り返し、現在形）」にも、この呪術の匂いがあるのです。ただの紙切れなのに、単なる紙切れ以上であるかのように思えてくる。そこがまさに呪術なのです。契約書のおさまりの悪さや不自然さも、まさにこの呪術性と連動しています。ごく普通の自然言語として消費されてしまったら、契約書には「ただならぬ感じ」は発生せず、呪術も生じないのです。 195

日本語で基本形が使われるのは、（英語も同じだが）普遍的な事実を表す場合や習慣をあらわす場合でしょう。日本語ではこれ以外にも慣例的に基本形が使われる場があります。料理本では命令のニュアンスを込めて基本形が使われていました。特に基本形がよく使われるのは、日記です。日記の場合、現在であるという趣旨ではなく、メモ的にとりあえず書き付けただけという「身振り」を示す機能があるのではないでしょうか。いずれにしても基本形の「宙づり」感が活用されているが、そうした興味深い「暫定性」や「中途半端さ」が様式化されうるところこそが、まさに日本語の興味深い側面のように思われます。基本形は、物語のあらすじなどを語る時にも使われます。 197

第８章　契約書を読む（２）

契約書は現実世界に対して拘束力を発揮することが期待されています。しかし、あくまで文書に過ぎない。ところが。それが私たちに影響を及ぼし、目の前の即物的な現実を変える、ということが起きます。「宙吊り感」は、そうした拘束力の効果を高めるのに大きな役割を果たしているようです。 210

ここには見えないものが見えるものに力を及ぼす変化を起こすという点で、呪術と通ずるものが見て取れます。腕力や武力といった直接的な実力行使ではなく、あくまで言葉の力をもって何らかの作用を及ぼそうとするところには呪術に通じる要素があるように思います。特に面白いのはジュースに。対しても契約書にしても、言葉で現実に働きかけるために普通の言葉と違う「形」を与えられているということです。

契約書には物事の関係を示す文言が入っています。「次のとおり」というのは、一つの文言が別の文言と持つ関係を示唆しています。「対し」というのは、言うま 212

でもなく甲と乙の関係を示します。また、「申し入れ」の有無と「更新」とを、時系列の中で関係づけています。こうした書きぶりは、この契約書の文言の「威力」の形成にとても大きな役割を果たします。このように関係性を際立たせた書き方をすることで、まず世界が関係性によって出来ているのだという了解が生まれるからです。「甲」「乙」という書きぶりも、 関係のあるものと関係のないものときれいに峻別し、あくまで関係のあるものだけを話題にしかつ問題にするというところが、駐車場の契約書の論法ではとても大事になってきます。 214

第９章　小説を読む

文学作品はその他の文章とどこが違うのでしょう？どのあたりに特色があるのか？この１００年ほど、批評家や研究者はずっとこの問いにぶつかってきました。答えの手がかりは、「出自」です。これまで見た文章は、ほとんどの場合、「出自」が明確でした。レシピにしても説明書にしても。これはレシピの一部である説明書であるという風にはっきりとジャンルを示すことができました。文学作品でも 私たちは「これから小説を買うぞ」「さあ小説を読もう」という明確な心構えを持って、作品を手に取ります。ただ、文学作品には他の文書のようなはっきりとした用途はありません。せいぜい娯楽とか趣味といった言い方で、ゆるく枠を示せるだけです。明確な用途がないということこそが。文学作品の最大の特徴かもわかりません。 246

孤立こそが文学作品の文章の大きな特徴だとすると。文学はどこかに素性の不明さを抱えているということにもなります。もちろん、この素性は永遠に不明なわけではありません。素性の不明さを少しずつ乗り越えながら意味を受け取り解釈し、さらには読みどころを捉えていくといった作業が、作品を読む時には伴います。こうした作業を通し、どこか曖昧模糊とした状態から、少しずつ霧を晴らすように何かを捉えていくというのが文学作品の読みのプロセスなのです。 250

「蹴りたい背中」を例にとって考えると、語尾に注目しながら読むと、不安定さを感じます。語尾には構えが出ると言いましたが、そもそもこの語り手には一定の構えがないのではないか？語尾の使いかたを通して浮かび上がるはずの語り手と読み手（聞き手）との関係が今ひとつ不明確なため、語尾の変化がそれ（不安定さ）を助長しているように感じられます。不安定という印象を与えるのはその為ではないかと思います。 254

第１０章　詩を読む

多くの人が文学作品の言葉はちょっと特殊だと思っているでしょう。でも、詩は特別扱い。有難いものとされたり、よく分からないとされたり、いずれにしても詩は遠くに追いやられがちです。そもそも詩は形が命。詩ならではの特徴を見極めたいと思います。重要なポイントは「行分け」と「繰り返し」です。 274

日本語で行わけを特徴とする、いわゆる口語自由詩が描かれるようになったのは、せいぜい１００年と少し前のことにすぎません。はるか以前から和歌や俳句などの韻文の伝統はありましたが、これらは一つ一つのユニットが非常に短く「行わけ」ということはさほど問題になりません。そういう意味では「行分け」は口語自由詩という西洋文学の影響の下に生まれた新しいジャンルと密接に結びついていたと言えるでしょう。 276

では「行分け」はどのような効果を生んでいるのでしょう。「行分け」は音節の規則性を反映しているのです。日本語でも音節の数は形式上大きな意味を持ちます。伝統的な韻文では、７５とか８６といった音節の数の組み合わせでリズムを作っています。西洋語でも日本語でも行分けには音の特徴を可視化する機能がありそうです。行には言葉の音的な特質が目に見える形で現れているということです。 277

高橋源一郎さんは行訳が死の本質の一つだとする一方、なぜ詩人が行分けをするのか？その理由については「角を曲がる」という喩えを使いながら慎重な説明をしています。 278

> 詩の本質と考えられるもののひとつに改行があります。改行というものはなぜ存在するのでしょうか？詩人に聞いてもはっきりとは答えてくれません。私の考えでは、詩人が改行するのは、その行のところで言葉の角を曲がるからです。一つの行を書く、ある場所に到達する、その時、小説家はただ早く目的地に着くことだけを考えます。それに対して詩人は角に来たら曲がりたくなる性質を持っています。ここを曲がった自分の知らない何かがあるのではないかと思って角を曲がるのです。角を曲がるとまた角がある。小説家なら角でなくメインストリートをまっすぐ歩いて行きたいと思うでしょう。しかし詩人はその方の向こうにある隠されている何かが気になってしょうがない存在なのかもしれません。

改行には、このように言葉を独立した声として際立たせる作用があります。改行のおかげで言葉がまるで外からの新しい到来物のように響く。そこでは、どの言葉がどの言葉に従属するかという論理的、もしくは感情的な関係性は、後景に退いてしまいます。このように改行を通して切り離された言葉は、散文的な連なりの中では見えにくかった佇まいを改めて見せ始めます。ことばの「音声らしさ」や「物らしさ」、「身体性」などをより強く感じることになる。それだけに、すっきりと頭には入ってこなくなるかもしれません。散文的な流れはスムーズな内容の理解を促進しますが、改行の多い語りでは小さな違和感や異物感が差し挟まれます。 281

改行のおかげで、私たちは言葉の中に潜む他者性と出会います。通常は。話したり書いたりする人は、言葉をしっかりと自分でコントロールしています。しかし、時には、言葉は思いがけない展開をする。言うつもりでなかったことを言ってしまったり、偶然の要素が紛れ込んだり、もっと端的な例としては、別の主体の言葉が途中から自分の言葉に割り込むこともある。 292

谷川俊太郎さんの「生きる」は、そうした他者性との出会いそのものをテーマにした詩です。言葉のいちいちに他者性が付随していて、行ごとに詩人が角を曲がる 284

という印象があります。

２つ目のポイントであるコトバの「繰り返し」に移りましょう。おそらく多くの人が詩では言葉が繰り返されるものだとわかっているでしょう。逆にごく普通の言葉もちょっと繰り返しを入れれば、詩っぽくなってしまう。試しに、カフェの注意書きを少しいじって、詠嘆や繰り返し挿入してみましょう。少々詠嘆や反復を混ぜるだけで、カフェの注意書きにも詩のような風情が生まれます。繰り返しは、「風情」なだけであって、詩になるわけではない。

詩の言葉の反復は単なる同じことの繰り返しではないのです。いちいちが新しい独立した出来事となります。たとえ同じ言葉の繰り返しであっても、それを単なる反復ではなく、新しい言葉の発生だと感じさせるような場が詩では形成されています。だから詩を上手に読むためには、反復のそれぞれを新しい言葉の到来として読む心の構えが必要となります。

谷川さんは、同じパターンを繰り返しながら少しずつ言葉を入れ替えることで、次は一体どうするんだろうという気分を作り出すのがうまいです。行ごとに「いったい次はどうくるだろう？」とこちらに期待させつつ裏切るテクニックが巧みです。

詩の反復には、同じコトバの繰り返しでありながら、新しい何かを付け加えて生み出す不思議な作用が備わっています。繰り返しがうまく活用され期待や予感が研ぎ澄まされることで、ことばのつらなりがストーリーを生み出すわけです。人が時間の流れや出来事に意味を見いだし納得したりおもしろいと思ったりするときの感受性の基礎が、詩の形には詰まっているといえるでしょう。

おわりに

本書を最後まで読んでいただくと、国語教育で意識すべきは文学か非文学かといった区別ではないことがおわかりいただけると思います。実用文を学ぶことの意義を訴えている人が掲げるべきは、「既存の形式に縛られることばの領域」と「形式をつねに更新することが求められることばの領域」という区分となるでしょう。前者は、役所の文章などフォーマットが明確に定まっているもの、後者は文学作品です。文学作品は形が更新されるからといって形のルールと縁がないわけではありません。むしろ、そうした文章でこそ、形の縛りには敏感にならざるをえないでしょう。

形に意識を向け、その働きを知るためには、形の機能が濃厚に発揮されているものを読みながら、どうやってことばの形を受け止めるかを学ぶ必要があると私は思います。そういう目的のために私が強くお勧めするのは、なんといっても詩です。必ずしも詩を読む必要はありません。事務文章をまるで文学作品を読むようにして読んでみればいいでしょう。そうすると言葉の豊饒な世界が一気に目の前に開けてくるでしょう。